

## I N D E X

1	宿敵との再会	002
2	処女をいただく	025
3	ふたなり公爵夫人	069
4	会談	103
5	選択肢	126
5-1	見せつけセックスをする	127
5-2	殺す	144

## 1 宿敵との再会

あの時別の選択をしていたら、と思う瞬間が俺にはある。

例えば国の存亡を賭けた決闘の時、どうして俺は短剣を腰にさしてなかったのか。

なぜ、左目に刃が迫った時かわせなかったのか、とか。

今となつては考えても仕方ないが、こうも長雨がずっと土呂傷が疼いてしまい、余計な記憶をついたぐり寄せてしまう。

二十年前はこれでも一国の將軍としてそれなりに名の通った人間だった。

——ファズマのログニルと聞けば、隣国アウグスタの人間は震え上がったものだ。そのくらい名だたる將軍を蹴散らし、その死体を国境にうちすえて、侵略してくる兵士どもを屠った。

だが所詮は武勇の取り柄しかない平民出の男だ。後ろ盾となつてくれる貴族などいやしな

自分の与り知らぬ場所あずかで取り交わされた謀略により、祖国はどんどん居心地の悪い場所になつていった。

もう将軍も辞めて、傭兵にでもなろうかと思ひかけた頃、戦場で奴と出会つた。  
パルメ。

傭兵の腕を買われて臨時の将軍となつた青年。

隣国最後の切り札。

いや、切り札は言い過ぎだな。あいつが従えていた兵士はどいつも若く、成人すら迎えていないガキもいた。

義勇兵というやつだ。

かたや祖国に首を締められつつある男と、退路をふさがれた青年傭兵。  
全軍の兵力をぶつけ合うにはお互い、いろんなものが見えすぎていた。

十月二十日戦い抜き、互いに国境は揺るがず。  
とつき

結果、世にも珍しい将軍同士の決闘で決着をつける事となつた。

いたずらに兵を死なせ、国土が荒れていく様を見かねた大神官からの申し出だった。

付き合いの長い部下たちは皆やめるよう進言してきたが、このばかばかしい戦いを終わらせるにはあれが最良の方法だった。

左目を失った今でも、そう信じている。

それに俺もあの頃は三十路みそじに入ったばかりで、剣の腕がそこまでなまっていなかった。ひと回り年下のガキに負けるとは思いもしなかった。

——今でも目をつむればバルメが放った斬撃の余韻が聞こえてくる。

美しくも腹立たしい剣戟が。

互いに相手の先を読み、かわしては受け流す。距離を詰めては離れ、決め手となる一撃を探り合う。

奴の視線、息継ぎ、足の位置。

全て次の動きに繋がっている。辺りは水を打ったようにしんと静まり、バルメが剣の柄を握りしめるのが良く見えた。

まだ二十歳を過ぎて間もない青年は、この決闘に心踊っていた。

俺との戦いを待ち望み、いまや楽しんでゐる。己の実力を出し切り、今日まで高めてきた剣技を全て吐き出せることに歓喜している。

ああ、そうだ。俺たちは同類だ。

長らく続いた戦いをばかばかしく思いながらも、宿敵と言える存在をどうしようもなく求めている。

ただの人殺しだ。

自然と笑みがこぼれた。視線が交錯し、パルメの剣が凄まじい速さで大剣を突いてくる。だが俺の方が奴の首に近い。そのまま横薙ぎに振り切れれば俺の勝ちだ。

大剣がびたりと彼の首元に吸い込まれていく。はずだった。

びしり、といやな音が聞こえた。ほんの少し視線をずらす。大剣の刃に小さな亀裂が入っていた。それはあつという間に蜘蛛の巣状に広がり、大剣を粉々に打ち砕いた。

『っー！』

驚愕と同時に左の視界が赤く染まった。

目を斬られた。

焼け付くような痛みが生まれる。地面に血がぼたぼたと垂れていた。

ここで腰に短剣を差していれば、まだ彼と戦いを続けられただろう。だがその日は短剣を差し忘れていた。

俺が扱うのは大剣だ。短剣など、野宮で小物の手入れをする時にしか使わない。

なんと愚かで、ばかばかしい結末か。

永遠に続くかと思われた決闘は、パルメの一撃によって終わりを迎えた。

俺は左眼を失い、決闘を始める前に取り交わした誓約通り、国境は大きく押し下げられ、祖国の領土は大いに削られた。

帰国後、敗北の責任を取らされ、将軍職は取り上げられた。今まで無数に与えられていた勲章も無きものとされた。

ひと月も経たず俺は国を出た。正直なところ、せいせいした。

パルメにやられた傷がようやくふさがりかけた頃、あいつが殺されたと人づてに聞いた。

(そんなバカな……!)

寝耳に水もいいところだ。

だってそうだろう？ 俺にこれほどの手傷を負わせた男が、こんなあつけなく死んでいいものか？

しかし傭兵ギルドや酒場で聞く噂はどれも同じ内容だった。帰国まであと数日という所で、野営した森の奥深くで襲われたと言う。遺体の損傷は激しく、からっぼの棺のまま国葬が行われたそうだ。

噂ではまことしやかに、パルメを殺したのは決闘で負けた俺だと囁かれていた。あるいは俺の配下が決闘で負けた腹いせに俺に命じられて報復したのだ、なんて話もあった。

どれもこれもでたらめだ。

しかし俺の出奔しゅっほんは知れ渡っていて、噂の補強にしかならなかった。

それから二十年が経ち、今ではパルメの話をする人間はいなくなつた。代わりに当時、彼の副官だつた小人族のヒルポリとやらがパルメの跡を継ぎ、祖国を打ち破つて、今では大將軍さまだ。

傭兵から成り上がった英雄として、大きな顔をして、のさばっている。なんでも公爵夫人と

結婚し、子供までもうけたそうだ。

「くそつたれ」

霧雨降る通りで悪態をつくくと、路地裏から男たちの下品な笑い声が聞こえた。

ひどく耳障りだった。

左目はじくじくと疼くし、良い娼婦にも今夜はお目にかかれない。

この憂<sup>う</sup>さを晴<sup>た</sup>らしたくて堪<sup>たま</sup>らない。

そんな気分だった。

「見ろよ。見ろよお！ この姉ちゃん、すげえおっぱいしてるぞ！ 牛みたいにでっけーのなあ！」

「今夜は俺たちと一緒に寝ようぜ。僕チャン、添い寝してやるからよお」

「乳首浮いてるけど、そのローブの下、何はいてるのかなー？」



三人の傭兵崩れが女を一人つかまえて、品性のかけらもない言葉を振りまいていた。

「——離せ……っ！」

つかまった女は傭兵崩れの手から逃げようと、もがいている。近くの建物から漏れた灯りに、一瞬だけ彼女の顔が照らされた。

雨でしつとりと濡れた黒髪が頬に貼りついて、えもいわれぬ色香を醸し出していた。

歳は二十歳か。

小さな唇は紅もさしていないのにほんのりと色づいていた。男たちの汚い手にわしづかみされた胸はなるほど、彼らの手からこぼれるほど豊満な育ちぶりだった。

(へえ……)

彼女と目が合う。

どうせ助けてくれと哀願してくるんだろう。それに乗るのも悪くない。

だが彼女は意外にも自分の顔を見て、驚愕の表情を浮かべた。

「——お前、ファズマのログニル……ッ！」

もう誰からも呼ばれることがなくなった二つ名を、彼女は口にしたのだ。

(——知り合いか?)

いや、こんな美女を忘れるとは思えない。今までに買った女はだいたい覚えてはいるが、これほどの美女となると大枚たいまいをはたくしかない。セックスするのに、そこまで金をかけた覚えはなかった。

正真正銘、初対面だ。それなのに俺の顔を知っている。となると自然とある疑問が浮かび上がってくる。

この女は誰だ?

興味がわいた。

憂さ晴らしに男たちを叩きのめして終わろうと思っていたが、考えが変わった。  
よし。

「おい、そのあんた、助けてやるよ」

一方的な申し出に彼女が返事をするより先に、踏み出した。

「なんだてめえ!」

女を路地の脇に追いやると、三人のうちの一人がナイフを引き抜いて突進してきた。突きだした手を絡め取り、顎を軽く小突いた。

カクン、とあつけないほど簡単に男が気絶する。

まずは一人。

「——てんめえ。この女は俺たちのもんだぞ！」

残りがすばやいパンチを繰り出してきたが、気絶した男を盾にした。背骨から妙な音が聞えたが、こっちの知ったことじゃない。

すばやく口の中で詠唱を唱える。

大気を操る魔法だ。ガキの頃から得意だった。盾にした男の胴体で死角を作る。剣を引き抜いて、横薙ぎに斬ろうとするのが見えた。

瞬間、掴んでいた男を敵に放り投げ、魔法を炸裂させた。

男たちの身体が大きく打ち上がり、そして路地裏のゴミ溜めにきれいな弧を描いて落下した。

「いっちょおしまい、と」

三人の傭兵崩れはもううめき声一つ上げられなかった。

どこからか、うるせーぞ！ と非難の声が聞こえたが、霧雨の音に消された。いまや路地に立っているのは俺と彼女だけだ。

男たちが落下した方向を呆然と見つめる彼女に顔を近づけた。

「っ！」

近くで見れば見るほど、上玉じょうだまだ。

こういう美女とご一緒できるのなら、俺の運も悪くない。

「今夜のお相手は俺でどうかな？」

なるべく好意的に言ったのだが、彼女のお気に召さなかったらしい。

パチン、と差し出した手をはたき落とされた。

「っ！ 貴様と寝るつもりはない」

おや、ずいぶんと高飛車たかびしゃな物言いだ。

ますます興味がひかれる。將軍時代は気位の高い女をベッドの上で服従させるのが好きだ

ったから、尚更だ。

「ひどいなー。これでもテクには自信あるんだぜ？」

手をワキワキと動かしながら、彼女を壁に追い詰めた。ちようど彼女のつむじが見える。しつとりと濡れた黒髪は背中まであり、その一房をつまんで、クルクルと手で弄んだ。

男と戦うのは趣味じゃないが、こんな美女と遊ぶのは大好きだ。

追い詰められてもなお視線をゆるめない彼女がおもしろくて、ついローブに包まれた太ももの間に足を割り入れた。

「っ！」

すぐに足を閉じようとするが、もう遅い。割り込ませた足をさらに押し込んで、彼女の股のあいだにちようど俺の太ももが当たるようにした。

男に慣れていない。

この反応なら処女か。

だとしたら大当たりだ。息がかかるほどの近さで、ささやいた。

「初めてなら優しくするぜ？」

つ、とローブの裾から手を差し入れると、驚いたことに彼女は何も服を身につけていなかった。

「お」

ローブの中は全裸だった。たわわに実った乳房にくびれた腰、薄い肉付きの腹に、肉感的な太ももが大層魅力的だった。

「実は娼婦じゃなくて痴女なのかな？」

「ちがっ！……これには、訳が……っ……っ……！」

反論する声を見殺しして、たふたふと乳房を揺らすと、彼女は恥ずかしそうに目を伏せた。

「処女のフリ、うまいねー」

「フリじゃな……い……、……ッ」

必死に唇を噛んで耐える姿がそそられた。いつの間にか雨はやみ、むわりとした湿気が辺りに漂っていた。

本当なら宿屋に連れ込んでするのがいいんだが、奴らとの一戦でまだ心が高ぶったままだった。

一回又いてから、宿に連れ込んで文句は言われまい。

白い乳房を舌でしゃぶると、嫌そうに身をよじる。肩や頭を叩かれたが、痛くもかゆくもない。

これが演技だとしたら相当なものだ。どこまで処女を演じきれるか、逆に試してみたくなた。

「可愛いねえ」

まだ反応を示さない乳首に唇をすぼめて、吸い付く。舌は使わない。ただ吸うだけだ。ぢゆうーと音を立てて下品に吸いあげた。

「ひゃ……、……や、……あ、あ、あ…………！」

俺の下半身を直撃する悲鳴を出しやがる。

ちゅぽん、と右乳から左乳へ口を動かす。そのまま、もう一度深く乳首を吸い上げた。

「ひい……。っ……んん……！！」

「イイ声で啼けるじゃないか」

軽く尻を叩いてやると、また可愛らしい悲鳴を漏らした。そのまま豊満な胸を両手で真ん中

に寄せて、左右の乳首をくっつけ合わせた。

「ほうら。今度はどっちを吸ってもらいたいのかな？　右？　それとも左？」

片方の乳首を指でピンとはね上げた。

「いやあ……、やめろ！」

まだ余裕があるな。

舌の上にためた唾液だえきを寄せてあげた胸の上に垂らす。透明な液体がゆっくりと乳房を垂れていき、くっつけ合わせた乳首を濡らす。そのまま上向いた乳首をつつ突き合わせた。

「乳首相撲ちくびずもうだ。右と左どっちが強いでちゆかねー？」

でかい乳輪を指の腹でこね、丹念たんねんに胸を責める。舌で乳首をしゃぶり、前歯で噛んでは上唇でねぶる。

ちゆぶちゆぶと厭いやらしい音が狭い路地裏に響いた。

彼女は必死に息を殺していたが、俺の水管てくだに感じているのは確実だった。

ぶくりと立ち上がった乳首は今や俺の唾液でヌラヌラと光っている。そこへズポンのベル



トをゆるめ、勃起した竿を取り出した。

「ひっ！」

「そんな怖がらなくていい。このぶつといの、今からこの乳まんこに挿入するだけだから言うなり、胸の谷間に肉棒を突っ込んだ。

膣に突っ込むのはまた異なる圧迫感に、肉棒がたくましくなる。

「うひょー。結構長さに自信あったんだけどなあ。先っぽも出てこないわ」

むぎゅ、と胸を締め付けると、肉棒の熱さを感じるのか、彼女がふいと顔をそむける。

「いいね。その顔そそるね」

「っ、黙れ。この……、……変態っ」

「ローブ一枚に全裸で歩いてた女に言われたかないね」

彼女の頬が羞恥心で赤く染まる。

その間にも胸にはさまれた肉棒を上下に動かし、乳首をひっぱると、豊満な乳房が揺れる。

「痛いほうがいいかな？ この痴女」

耳元で罵倒を囁くと、おもしろいほど彼女の乳首が反応する。綺麗な瞳に涙がたまり、それ



でも抵抗しようとして俺の胸に手をつけて身体を引き離そうとする。

「うーん？ もっと激しくしてやろうか？」

彼女が答えるより先に、胸に突き入れる速度を増した。

「いやあ……、……っ……あ、あ、あああ!!」

嬌声に俺の肉棒が固くなる。もはや我慢ならなくなり、乳房を手でわし掴むと、激しくたゆませた。

時おり見せつけるように筋の張った逞しい竿やカリ首を胸の間から覗かせた。そうすると彼女が嫌そうに顔をそらし、必死に視界に入れまいと目を閉じるのだ。

実にそそられた。

「ここひと月は女を抱いてないからな。じっくり虐めてやるよ」

ぱちゅんぱちゅん、と気の抜けた音は逆に彼女を犯している実感を俺に与えてくれた。

まだ序の口だ。

このおっぱいを俺の精液だらけにして、お綺麗な顔も汚してやる。黒髪だから、ぶっかけたらさぞ色が映えるだろうな。

「もう……………、やめ……………ろ」

「うーん聞こえないなあ。もっと大きな声で言ってくれないと。おじさん耳が遠いからなあ」

「も、やめて……………くれ……………！」

「だゝめ」

ニヤリと笑いながら、浅黒い肉棒を柔らかいおっぱいに滑り込ませる。

張りのある胸に俺の竿をこすりつけてやる。下乳、横乳、それに谷間。

肉棒の形をあまさず味わえるよう、竿ごと胸を下から持ち上げたり、カンをくつつけたり、乳首に亀頭をくつつけ合わせた。

「……………い、やだ。こんな……………あ……………、恥ずかしい……………格好……………！」

「またまたあ。好きなんだろう？」

ぶちゅん、と肉棒を豊満な胸の中にしまい込み、激しく突き上げる。どくどくと彼女の鼓動が伝わってくる。

感じている証拠だ。

「ほら。イクぞ。全部受け止めるよ。この淫売！」

金玉から精液が昇ってくる。その全てをぶちまけるように彼女の胸に精液を吐き出した。どぶん、と重たい音が響く。彼女の胸をめいっぱい搾って、きつく竿を包み込ませた。

「ひっ……いやああ、あ、あああああ!!！」

甲高い悲鳴を聞かせてもらえて、ゾクゾクした。

溜めにためた精液はまだ止まず、彼女の胸のなかを汚し続けた。

互いの息だけが路地裏に響き、ようやく一呼吸ついて、力をなくした性器をズルリと引き抜いた。竿までぐつちよりと精液に濡れていたのも、彼女の乳房で拭かせてもらった。

むわりとした匂いが鼻につくのか、彼女がそっと口元に手を当てて顔をそらす。

いいねえ。まだ自分がおキレイだと思ってる女の顔。

「さあて、どれだけ俺を気持ちよくしてくれたか、確認してみようか？」

ゆつくりと寄せてていた胸の谷間をひらく。それは下の口をご開帳させる時と似た感覚をもたらしした。

くぱあ、と開いた胸の谷間には白く濁った精液が糸を引くように垂れていた。

又チ又チとおっぱいをすり合わせては、彼女のおっぱいが精液をぶっかけられて汚された

様をじっくりと堪能する。

このまま見続けていたらまた勃起しそうだ。

そのくらい胸の谷間には出したての精液があふれて、地面にぼたぼたと垂れていた。

自然と俺の視線は彼女の胸からへそ、その下にある股間へと行き着く。

意外にも彼女の股間はツルツルだった。そつと指を股に差し込むと、生あたたかい液体が漏れていた。

「これはナニかな？」

ビクンと彼女の肩が震える。

「ちがつ……それは、お前が……！」

「悪い子だなあ。客におっぱいしごかせてる間に自分だけ気持ちよくなるなんて」  
にちゃあ、と彼女の愛液で濡れた指を見せつけるように、彼女の目の前で広げた。

「これは追加で楽しませて貰わないと、ワリに合わないよな？」

クイツと顎を上向かせて、最後通牒さいごつうちようを突きつける。その瞳が恐怖と少しの快樂に染まっていくのを楽しもうとすると、彼女は意外な言葉を口にした。

「つ、私は娼婦ではない……!」

「は?」

ローブ一枚で歩いてた女はどう見ても痴女だ。それか娼婦。他に何かあるだろう。

彼女はブツブツと文句を言い出した。

「くそ。決闘した時はもう少しマシな男だと思っていたのに、こんな……、こんな……つ……、  
……、貴様も兵を率いる將軍だろう。恥を知れ!」

二十年前ならその罵倒ばとうにも反応してやれたが、あいにく今の俺はしがない傭兵だ。

「——俺が將軍やってたのはもう二十年も前だぞ。誰と勘違いしてるのか知らんが、今はただの傭兵だ」

そう言うと彼女は目をパチパチと開いて、ふしぎなことを言った。

「……今は新暦一〇〇九年だろう?」

「二〇二九年だよ」

なんだ? まさかおつむのヤバい女を引き当てたのか?

いまだ路地で気絶したままの男たちがちよつとだけ羨ましく見えたが、こんなに具合の良

い女を放り出すのはもったいない。

「——では、その傷も本物なのか？」

柔らかい白魚しろうおのような手が俺の左頬をなぞり上げ、眼帯でくるまれた左眼に近づいてくる。とっさに手首を掴んだ。

一度傷つけられた場所をさわられるのは好きじゃない。

この傷で今夜の苛立ちいらだを抑えきれなくなったとなれば、尚更だ。

二十年前、確かに俺は將軍だった。だがそれを知るものはかなり減っている。彼女の外見からして生まれたのは俺が祖国を出奔した頃だ。なぜ、その時期を正確に言い当てられる？  
—  
体彼女は何者なんだ？

背筋がぞくりとした。

「なあ、お前——」

黒髪の美女は子どものようにあどけない顔を浮かべてから、ありえない言葉を言い放った。

「私はパルメだ。国境の戦いでは世話になったな。ファズマのログニル」



## 2 処女をいただく

「あ……つまりアレか？ 実はお前は女だった、と？」

「違う！ 私はもとから男だ！ 何度言わせる気だ、貴様！」

宿屋のベッドに座らされ、今は目を閉じてこちらを見るな、と彼女に厳命げんめいされていた。

振り返ったら殺す、とも言われた。

俺だって自分が精液ぶっかけた女が実は男で、しかも二十年前に自分の左目をダメにしてくれた宿敵だなんて思いもしない。数分前まで昂たかぶっていた性器はすっかり萎なえていた。

こんな萎え方がかつてあっただろうか？ いや、無い。

彼女の声は、まぎれもなく女性のものだ。戦場ならよく通るだろうし、ベッドの上でも良い声で鳴いてくれるだろう。まあ、さつき路地裏で鳴かせたが。

「くっそ。しかも、どれだけ溜め込んでいたんだ。貴様……。くさいし、量も多いし、気持

ち悪い！」

「人の精液をそんな風に言わないでくれますか？ おじさん、傷つくなあ」

「そんな繊細せんさいな男は、路地裏で会った人間に精液をぶっかけたりはしない！」  
ごもつともである。

だが、問題はそこではない。

「で？　なんで二十年も経って現れたんだ。幽霊とか言わないよな？」

彼女はしばらく黙っていたが、やがて意を決して答えた。

「——お前は妖精のいたずらを知っているか？」

「まあ、噂半分には……」

ガキの頃、何回も聞かされた話だ。

満月の夜、森の水辺には妖精たちが集まる。いたずら好きな彼らは月の力を借りて、水辺の死体をおもしろ半分によみがえらせる。だから月の明るい夜、森の水辺にいつてはいけないよ。妖精の力で復活した死人が生者を殺そうと待ち構えているから。

「おい、まさか……」

いやな予感がした。

あの子どもだましの噂が本当なら、バルメが元の姿ではないことも説明がつく。

いたずら好きな妖精が、男として死んだ彼を女としてよみがえらせたのも、納得がいく。

「ご想像の通り、やつらのいたずらで、私はこの世に復活できた、という訳だ。しかも女の姿でな。なんとかローブを手に入れて、もっとマシな服を探していたら連中に出くわし、お前がやって来て、勝手に助けて、こんなマネをしでかしてくれたわけだ」

「あ……その点はすまなかった。飯でも服でも買ってやるよ。まあ、しがない傭兵の給料なんであまり期待されても困るが」

「傭兵？ 将軍ではないのか？」

バルメの声が近くなった。どうやら俺の現状に興味を持ったようだ。

「おまえに負けたあと、国境が大いに押し下げられてな。その責任を取らされて、祖国じゃ能なし扱いさ。国政を執<sup>と</sup>り行う連中は言いたい放題。俺も今までの鬱憤<sup>うっぷん</sup>がたまつて、国を出た。お前が殺されたあと、ヒルボリが大將軍の地位に収まってファズマを攻め上げた。今じゃあファズマなんて国はないし、俺のことをファズマのログニルなんて二つ名で呼ぶ奴は、

昔部下だった連中ぐらいただ」

「——ヒルポリが大将軍？」

パルメの声に怪訝けげんなものがまざる。

「ああ。お前の副官だった男だろ。今じゃあ、王室に縁えんの深い公爵家のご夫人を妻に迎えて、かなり羽振りはぶが良いらしいぜ」

「それは本当か？」

目をふさいでいた手を引きはがされた。目と鼻の先にパルメが立っていた。ローブが開いている。柔らかな肢体したいが丸見えだった。たわわに実った胸にかけた精液は、お湯で湿らせた布ですつかりと拭き取られていた。柳のように細い腰が続き、肉付きの良い太ももが伸びている。股の間には滑らかな肌が続いている。もう少し身体を傾けて足を開いてもらったら、彼女の秘部がよく見える角度だった。

ごくり。

萎えたはずの性器に血が通う。

待て待て。こいつの中身は男だ。しかもかつての宿敵だぞ。妖精のいたずらによってこの世によみがえったとはいえ、俺と同じ男だ。

男を抱く趣味はない。

ないのだが――。

彼女の身体は実に俺好みだし、感度も申し分ない。それにこの美貌。妖精たちに感謝したいくらいだ。なによりもこの分だと復活してから誰とも寝ていない。

つまり処女だ。

今こいつと寝たら俺が初めての男ということになる。

かつて俺にひどい傷を負わせた宿敵を、もし屈服させることができたなら、どんなに気持ちいいだろう。

長年、悩まされてきた古傷ふるきずの痛みも少しはやわらぐに違いない。

パルメは今、俺が持っている情報を喉から手が出るほど知りたがっている。真剣に見つめてくる目がその証拠だ。

これは交渉するにうってつけの機会だった。

俺はニヤリと笑みを深めて、パルメの手首をそつと引き寄せた。

「これ以上知りたいうって言うなら、タダでとはいかないな。お嬢ちゃん」

「だれがお嬢ちゃんだ。私は男だと言って——！」

掴まれた手を引きはがそうとしたが失敗に終わる。当然だ。握力の違いは、路地裏でしつかりと学ばせた。

彼女にかつて俺と対等に戦った力はない。永久に失われたと言って良いだろう。妖精のいたずらで蘇ったとは言え、復活した身体はあくまで女の身体だ。かつてあの決闘で命を奪い合いい、剣を交えた青年ではない。

男を抱く趣味はないが、この艶めかしい肢体を味わいながら、かつての宿敵の心を屈服させて、おとし 貶めるといふのは、なかなか魅力的だった。

さらに手首を引つ張り、その腰を抱き寄せる。形の良い尻を手のひらに乗せたあと、尻の割れ目に指をさしこんだ。

「っー！」

キュツと尻が締まるが、その程度で俺の太い指は追い出せなかった。パルメの顎を手に取り、

息がかかるほどの近さでもう一度言う。

「さつき捕まつてた男たちよりは、優しくしてやるぜ。ま、ここで再会したのもなにかの縁だ。抱かせてくれるって言うなら、お前を殺した犯人探しだって手伝つてやる。なにせ今の俺は傭兵だからな」

金がない女にも支払えるものがある。

身体だ。

淡く色づく乳首を歯で優しく噛むと、彼女の腰がびくびくと揺れた。

おそらく——パルメを殺した人間はヒルポリだ。

間違いない。こいつが亡くなったあと最も利益を得たのはあの男しかない。

公爵令嬢との結婚、大將軍への昇進、傭兵出身ながらいまや大領主でもある。

この大出世ぶりを見れば、いやでも彼に疑いの目を向けざるを得ない。

パルメに長年副官として仕えた男だとも聞く。

そんな人間に裏切られたら、誰だつて復讐したくなるものだ。しかも今の彼女は、弱い。俺ひとりでも簡単にねじ伏せられる。大將軍となつたヒルポリに真相を尋ねに行くにせよ、一

人では無理だ。どうしたって仲間がいる。

「お前にとつても悪くない取引だろ？」

ちゅ、と音を立てて乳首を吸い上げると、美しい頬に紅がさす。眉根を寄せて羞恥に耐える姿に、そそられた。

こんな顔を浮かべている女が、自分の宿敵だと思つたとたまらない。俺の左目をえぐり敗北の二文字を刻みつけた青年が、いまや女となっている。その身も心も屈辱に喘がせることができるのなら、古傷の痛みも癒やされる気がした。

どうする？

目で問いかけると、彼女は長いあいだ逡巡したのち、こう言った。

「分かった。——抱けるものなら抱いてみる」

その言葉は、かつて男だった者としての最後の矜持きょうじだっただろう。だが、俺にはとつておきの挑発てんぱつとしか思えなかった。

ローブを引きずり落とし、あつという間に全裸に剥いて、ベッドに押し倒した。





「——ちよつと、待て……ログニ……、ふう、んむっ……!!」

パルメの上唇をなめ回し、両手で強引にその口を開かせた。最後のあがきとでも言うように、薄紅色の細い舌が逃げまわるが、それを分厚い舌で封じ込めれば、彼女のおなかが浮いた。張りのある胸が押しつけられる。

ひと月。ひと月だ。

女を抱いていなかった俺の身体は、彼女に胸を押しつけられただけで興奮が止まらなかった。

ちゅうちゅう、と逃げる舌を裏側から押し上げて、唾液を吸い上げる。息苦しさで彼女が暴れたが関係なかった。むしろ暴ればそうされるほど、興奮した。あいつを、パルメを二十年前ぶりに屈服させている。その昂ぶりによって下半身が熱くなり、ズボンのなかでふくれあがった性器を彼女の太ももに押しつけた。

「ひっ………あ………っ………んンン——ッ!!」

「なあ、これを今からお前のナカに入れてやるからな。覚悟しろよ」

パルメの瞳に怯えが走る。